雪舟による四季山水図巻の空間構成

THE SPATIAL COMPOSITION OF TWO *LANDSCAPES OF THE FOUR SEASONS* DRAWN AS HANDSCROLL BY SESSHU

真木 利江*, 和田 佳奈美**

Rie MAKI and Kanami WADA

The aim of this paper is to clarify the spatial composition of *Short Scroll of Landscapes* and *Long Scroll of Landscapes* drawn by Sesshu. We divided these long handscrolls into mountainous scenes and horizontal ones, and these were classified into five types based on an analysis of spatial composition. Through the comparison of two handscrolls, the followings were made clear: 1) the fundamental composition of both scrolls shows strong resemblance. 2) *Long Scroll of Landscapes* has more contrasted composition between mountain and horizontal scenes, and more systematic construction of four seasons.

Keywords: Sesshu, Landscape Paintings, Spatial Composition, Type

雪舟, 山水画, 空間構成, 類型

1. はじめに

本研究は、室町期に描かれた山水図に当時の理想的風景の型を想定し、これを抽出することを企図する研究の一端に位置づけられる。本稿では雪舟(1420-1506 頃)の真筆とされている2つの四季山水図巻を対象とし、そこに描かれる山水の空間構成の特徴を明らかにすることを目的とする。

わが国には絵と詞で物語を織りなす物語絵巻を初め、宗教、文学、記録・世相を主題とする卷子装の絵巻が多数現存している^{注1)}。一方、鎌倉期以来、日本にもたらされた山水画は禅林を中心に受容され発展をみるが、卷子装をもつ山水図はきわめて少ないことが知られている^{注2)}。本稿では雪舟の真筆とされる卷子装の四季山水図巻である京都国立博物館所蔵の四季山水図巻(重要文化財、以下山水小巻)と毛利博物館所蔵の四季山水図巻(国宝、以下山水長巻、1486年)の2巻を対象とするが^{注3)}、いずれも室町期を代表する希少な山水図巻である。

雪舟に関しては、明治期以降、美術史分野を中心に膨大な研究が蓄積されてきたが、とくに山水長巻は数多くの模本が示すとおり、江戸期にはすでに特別な作品として認識され、現在も雪舟の最高傑作のみならず日本水墨画の代表作と位置づけられ研究が重ねられている。跋文から夏珪との関連が古くから指摘されてきたが、とくに

近年では具体的な作品に即して形や意味の継承の様態が明らかにされつつある^{注4)}。また、山水長巻の全体構成を雪舟自身の人生や禅宗の理念と結びつける等、多様な研究・言説が存在している^{注5)}。これに比して山水小巻については山水長巻と比較したときの筆致の弱さもあり、まとまった先行研究がほとんど存在しないという対照的な扱いとなっている^{注6)}。いずれにせよ、これら2つの四季山水図巻について、作品自体の空間構成を問うまとまった研究は存在せず、また山水小巻と山水長巻の全体像を直接比較する研究も存在しない。

2. 研究の方法

山水小巻と山水長巻の概要: 本稿で対象とする2巻は山水小巻が縦幅 21.5cm、全長 1151.5cm (約 1:53.6)、山水長巻が縦幅 39.2cm 全長 1580.2cm (1:41.5) といずれも横長の長大な構図をもつ(図1)。一般に卷子装の作品は、一挙に全体像を眺めることの出来る掛幅装とは異なり、鑑賞者が自らの手でひもとき肩幅程度に画面を繰り広げ、その開閉を繰り返しながら展開させてゆくという独特の鑑賞方法となる。当時の一般的な卷子の縦幅に対して、山水小巻はやや小振りて手になじみやすい寸法であり、鑑賞者自身が巻物を繰ることを想定して制作されたと考えられている^{注7)}。これに対して山水小巻の倍近い縦幅を持つ山水長巻は、一般的な卷子の鑑賞とするには疑

* 山口大学大学院理工学研究科 講師・博士(工学)

** 竹中工務店 工修

Lecturer, Graduate School of Science and Eng., Yamaguchi Univ., Dr. Eng.
Takenaka Corporation, M. Eng.

図1 山水小巻と山水長巻のシーン区分

間があり、鑑賞自体の有無を含め鑑賞形式についてのまとまった見解を見ることができない^{注8)}。

また、いずれも四季山水図巻であり、春から夏、秋、冬を経てふたたび春の始まりへと季節が移り変わる構成をとる。画中に季節を表すモチーフがちりばめられており、現実の季節同様に切り替わりの明確なラインが存在する訳ではないが、春夏秋冬のおおよその展開を理解することが出来る^{注9)}。いずれも広く水面をたたえる夏景が最も長く、春景と冬景はほぼ同じ長さでこれに続き、秋がもっとも短いという構成を見せており、卷子全体に対する季節の配分は両巻ともほぼ同じである。

本稿では、両巻の空間構成の特徴を明らかにするが、近年、美術史の分野において素材空間または空間ユニットと呼ばれる、これらの作品が継承している意味を伴う図様のまとまりが指摘されている^{注10)}。しかし、単にモチーフを収集することだけでは、全体を構成することは出来ず、制作者による全体の構想があつてはじめて長大な巻子は完成を見ることができるといえよう。本研究の分析は、それぞれの作品には雪舟という制作者による全体構想があるということをも前提としている。

分析の流れ：両巻の全体像を概観すると、いずれも切れ目なく山水が連続するというより、いくつかの地形のまとまりをもって骨格が構成されているといえる。本稿では、四季山水図巻の空間構成の特徴を明らかにするため、画卷の寸法と鑑賞形式の相違、意味を伴う図様のまとまりについてはいったん問題を保留し、地形のまとまりを手がかりに全体をいくつかのシーンへと区分し、シーンの連続として全体を捉え直す。

シーンの区分においては、卷子の縦幅に収まりきらない巨大な岩山の存在が、岩山の一部分が描かれることで示唆されている箇所（以下、懸崖等）に注目するが、この表現のほとんどに両巻に共通して下部が挟れた懸崖という同じモチーフが使用されている^{注11)}。また、両巻を観察すると、懸崖等に両側を挟まれた部分とそれ以外の部分では、山水の姿に明確な相違があるといえる。つまり、前者は主に＜山岳景＞となっており描かれる川も細く急であるのに対して、それ以外の部分は左右に広がる水辺等、左右にゆるやかに連続する要素により構成される＜水平景＞となっている。本稿では、こうした2種類の景の対照を卷子の全体構成の骨格と捉え、これにもとづい

て分析を進めていく。シーンの区分を図1に示すが、山水小巻が山岳景3シーン、水平景4シーンの計7シーン、山水長巻が山岳景4シーン、水平景4シーンの計8シーンで構成されており、それぞれ右から順にシーン名称をS①-S⑦、C①-C⑧とする。シーン区分においては、地形のまとまりという観点から山岳景では懸崖等およびこれに重なる岩山を含め、水平景は懸崖等までを含め両者が重なる形で区分するが、空白表現によりシーン間の空間的断続が明瞭なS⑥-⑦、C②-③、C⑦-⑧は空白部で切断する形で区分する。

分析の大まかな流れとしては、まず2巻の全15シーンを対象に空間構成の特徴を明らかにし、つぎに卷子の全体構成についてシーンの並びや空間構成の対応関係から2巻の比較を行う。最後に卷子の空間構成について鑑賞という観点から考察を加える。

3. シーンの空間構成

3-1 分析の方法：ここではシーンの空間構成の特徴を明らかにするため、まず2巻にみられる山水の構成要素を確認する。その後、シーンごとに構成要素の配置の様相を三次元的な広がりの中に捉えなおすとともに、それらによって空間に与えられている方向性を抽出する。これらをもとに、空間構成の類型化を試みる。

＜構成要素＞山水の構成要素はおおきく地形、植物、人為的要素に区分することができる。地形は山や谷などの地面の起伏と水面であり、川、滝、洲浜、岩等も含まれる。こうした地形のひろがりには樹木や樹林、灌木といった植物、人為的要素が点在する。人為的要素には人物、道、建物、舟、橋等が含まれる。

＜配置の様相＞構成要素の配置の様相を三次元的な空間の広がりにとらえなおすため、それぞれのシーンに描かれる空間全体を、前後・左右・上下つまり、奥行・水平・垂直の3方向を持つ幾何学的な空間の広がりとしてとらえ、構成要素の配置の様相を、全体の空間内

表1 分析指標

構成要素	地形	山、水面、川、谷、滝、洲浜、岩
	植物	樹木、樹林、灌木
	人為的要素	人物、道、建物、舟、橋
配置の様相	位置	奥行：近景 / 中景 / 遠景 水平：左 / 中央 / 右 垂直：上 / 中段 / 下
	様相	連続 / 断続
空間の方向性	奥行：奥行感、水平：広がり感、垂直：上昇感

で相対的にとらえなおす。奥行方向は近景／中景／遠景、水平方向は左／中央／右、垂直方向は上／中段／下へそれぞれ区分し、連続／断続の様相を確認し、アイソメトリック図法により模式的に表現していく。

＜空間の方向性＞各シーンには構成要素の配置によって、空間の垂直、水平、奥行の3方向に対応する上昇感、広がり感、奥行き感といった動きのある方向性が与えられる。画面構成という点からは樹木や人為的要素によっても方向性は与えられるが、シーンの空間構成という観点から、山水の骨格をなす地形に注目し、シーンにおいて卓越する地形による空間の方向性を抽出し模式的に表現する。

以上の分析指標を表1にまとめて示す。

3-2 分析：ここでは山水小巻の冒頭のシーン S①について図2に模式図等を示しながら報告し、他のシーンについては配置の様相および空間の方向性の模式図のみを図3, 4にまとめて示す^{注12)}。

＜配置の様相＞全体に左右に連続する水平性の強い地形により構成されている。陸地と水面の関係はやや複雑で、とくに近景中央の岩山と左側の懸崖手前の岩山が、地形の空間的関係を不明瞭にしている。川が右遠景から左手前方向へゆるやかに連続し、中央近景の岩山に隔てられ、左側近景からやや左斜め奥へと連続している。左右端の近景にも水面が広がっている。右側の陸地は水面との間を右端奥から左手前へと連続するが、最奥部には樹林がぼんやりと描かれ、中景あたりから道が現れる。近景には柳の木が3本たちあがり、樹下に驢馬にのる高士と荷物を担ぐ童子、行く先を示す人物の3名が描かれている。中央の中景から遠景へかけては緩やかな陸地が中央でせり出す形で連続するが、右側には霞がかかり、左端の川沿いには樹木と建物が描かれている。右方からの道が橋を経て川沿いを連続し、左奥の樹林へ消えていく。近景中央の岩山は平板な形状でやや左上方へはりだし柳や梅の木を頂いており、その背後の様子は不明瞭である。左端には懸崖が描かれ、その右下を懸崖にそって左奥へと回り込む道が配されている。懸崖手前の岩山も平板で特徴的な形態を示すが、右奥へと張り出した最奥部に二本の梅の木と樹下の3名の人物、ここへ至る近景からの道が描かれている。

＜方向性＞水面が右奥から手前へさらに左奥へと、断続しながらも

緩やかにつながることで、前後に動きのある水平方向の広がり感が卓越する。左端では懸崖による上昇感とともに、これを左奥へと回り込む方向性も与えられている。

3-3 空間構成の類型：山水長巻と山水小巻の全15シーンそれぞれについて構成要素の配置の様相を明らかにし、それによって与えられる空間の方向性を抽出した。両巻子の山岳景計7シーン、水平景計8シーンのそれぞれについて、卓越する空間の方向性に注目しシーンの分類を行う。まず山岳景ではシーン中央に示唆される岩山によって強い上昇感が共通して与えられるが、中央の岩山に洞穴が穿たれることで一体的な奥への方向性が与えられている＜山岳景圍繞型＞と、中央の岩山の前面に配される構成要素により岩山の上昇性とは断続する深い奥行き感が与えられている＜山岳景断続型＞、中央の岩山手前に同じく巨大な岩山が重ねられることで巨大な岩山による方向性が二重に与えられる＜山岳景重層型＞に区分して捉えることができる。次に水平景では近景から遠景までが階層状に構成されることで強い水平性が強調される＜水平景階層型＞と、水平方向の連続性が右奥から手前中央へ、さらに左奥へとつながるように連続する＜水平景ラウンド型＞とに区分して捉えることができる。

これら各区分に該当するシーンを一覧表として表2に示し、分類ごとに構成要素の配置の様相について共通性を確認し、アイソメトリック図法によりモデル化を試みることで、空間構成の類型として捉え直す。また、それぞれの類型においてとくに強い類似性を示すシーンを確認していく。

山岳景圍繞型：シーン中央部に、岩山で囲われたまとまりのある空間を持つもので、これにより、中央の岩山による上昇感と一体的な奥行き感が与えられるシーンでS⑥とC⑦が該当する。C⑦の右側には懸崖が示されるが、いずれも洞穴を囲う岩山が部分的に表現されることで、中央の巨大な岩山が示唆されている。右側は水面で、中央の巨大な岩山の右手前に頂部に樹木を頂き水面側へと張り出す岩山が配され、この付近に人物が描かれている。中央の岩山で囲われた空間は洞穴状になっており、内部に建築物が配され人物が描かれるが、川や道によってさらに洞窟の奥へと空間が連続する。また洞穴上部では樹木が屈曲する。空間の左手前には建築的要素が配され、その左側には岩山と樹木が配される。いずれも左端の樹木の背後は霞がかかった不明瞭になっており、次シーンとの間は断続的である。S⑥とC⑦は空間構成としては強い類似性を示しているといえる。

山岳景断続型：中央の岩山の前面に配される構成要素によりシーン中央部で深い奥行き感が与えられる構成を持つものでS②④、C③⑤が該当し、すべてのシーンで両側が懸崖となっている。右側の懸崖下にはすべて崖道が手前から左奥へと回り込み、懸崖手前には岩山と樹木が配される。右側の地形はC③をのぞく3シーンで水面となっている。左側懸崖の左はすべて水面となっているが、懸崖の手前には左下から右へと高さを増す岩山が配され付近に樹木群が垂直に伸びる。中央部では構成要素の重なりや、奥へと連続する地形により深い奥行きのある空間が構成されているが、いずれも中景付近に建築的要素が配される。この中央部の空間構成は、S④とC⑤の間に強い類似性が認められる。いずれも右側の懸崖の左側に空白があり、空間的な断絶が示されており、ここへ左側に重心を置いて重ねられる岩山の最奥部が連続する。S②、C③はいずれも中央部において細長い形状を持つ川や谷などが奥へと連続する構成では共通するが、S②で

図2 構成の配置と様相 (S①/ 水平景)

図3 構成要素の配置の様相と空間の方向性 (S2-S7, C1-C4)

図4 構成要素の配置の様相と空間の方向性 (C5-C8)

表2 空間の方向性による分類と空間構成の類型

類型名称	空間の方向性	該当シーン	空間構成類型の模式図
山岳景	圍繞型	S6, C7	
	断続型	S2, S4, C3, C5	
	重層型	C1	
水平景	階層型	S5, C2, C4, C8	
	ラウンド型	S1, S3, S7, C6	

強い類似性が見られる組み合わせ

はこうした構成が複数回繰り返されることで C③に比して複雑な様相を見せる。

山岳景重層型：中央の巨大な岩山の前面に同じく巨大な岩山が重なることで、二重に強い上昇性が与えられるもので C①のみが該当する^{注 13)}。それぞれの岩山に上昇しながら奥へと回り込む道が配されることで、上昇しながら岩山を回り込む方向性も与えられている。

水平景階層型：左右に連続する要素が奥へ階層状に重ねられることで水平性が強調されるもので、S⑤、C②④⑧が該当するが、このうち S⑤、C④は強い共通性が認められる。近景から遠景まで連続する広大な水面が左右に広がり舟が浮かべられ、最奥部が遠景の山並みのシルエットで境界づけられている。またともに右端で水面から立ち上がる懸崖下に崖道が奥へと連続しており、懸崖の前後両方へ水面が連続する。左側の懸崖からは懸崖手前の岩山が水面に張り出す構成を持つ。一方 C②と C⑧はいずれも描かれる風景が水面を含まない山中の特徴的なシーンであり、片側は断続的である。

水平景ラウンド型：水平方向の連続性が右奥から手前中央へ、さらに左奥へとうねるように連続するもので、S①③⑦、C⑥が該当する。いずれもなだらかな陸地と水面により構成されるが、うねるような連続性は水面により与えられている。中央で張り出した地形には建築的要素が配される。懸崖等との接続においては、水面が懸崖等の背後に回り込む形で空間的に連続するが S⑦は断続を見せる。また 4 シーンのうち S①③は全体の地形構成がやや複雑である。

4. 全体構成：山水小巻と山水長巻の比較

雪舟による 2 つの四季山水図巻を、山岳景と水平景に区分し、全 15 シーンから 5 つの空間構成類型を抽出するとともに、類型ごとにシーン間の類似性について確認した。ここでは、図 5 にシーン分析において抽出した卓越する方向性を連続して表現するとともに、空間構成類型および類型内で見出された強い類似を示すシーンの対応を示し、それぞれの巻子の全体構成をシーンの連続として捉え直した後、2 巻の比較を行う。

まず山水小巻では、山岳景と水平景の繰り返しが S①-S⑥まで、ほぼ均等な長さで連続する。この 6 シーンの類型は、はじめに＜水平景ラウンド型＞から＜山岳景断続型＞という並びで 2 回繰り返され、その後に＜水平景階層型＞＜山岳景圍繞型＞が連続する。巻末は突出して長い＜水平景ラウンド型＞により締めくくられる。S⑥から S⑦への移行部では、空白によってシーン間の断続が示されているが、その他では、水平景の水面が山岳景の背面に回り込むことで連続的なシーン展開が行われている。

山水長巻では、冒頭部 C①、②、③で＜山岳景重層型＞＜水平景階層型＞＜山岳景断続型＞と比較的短いシーンが繰り返される。その後 C④から C⑦までが＜水平景階層型＞＜山岳景断続型＞＜水平景ラウンド型＞＜山岳景圍繞型＞と、それぞれ異なる 4 種類の類型が並び、最後は C⑧＜水平景階層型＞に終わる。C②から③へ、C⑦から⑧への移行において空白表現により断続が示されるが、その他では山水小巻と同様に水平景が山岳景の背後に連続するシーン転換が行われている。

山水小巻と山水長巻の比較：2 巻の間には様々な相違が認められる一方、明確な類似も指摘することが出来そうである。ここでは、雪舟が山水長巻の構想を練る際、以前に描いた山水小巻を念頭に置いていたという仮定にたち、山水長巻が山水小巻から継承している点と修正した点という観点から、両巻の類似点と相違点を整理する。

まず全体構成としては、山岳景と水平景の繰り返し、および山岳景の背後に水平景が連続する形でのシーン転換という基本的構成が継承されているといえる。

シーンの空間構成類型の順列について確認すると、まず山岳景の類型配置は冒頭の C①を除くと、強い類似性を示すシーン間の関係を含めて全く同一の形で踏襲されている。つまり、S②が C③に、S④が C⑤に、そして S⑥が C⑦に対応している。対応関係ごとに変更点を確認すると、S②、C③は＜山岳景断続型＞のうち、細長い空間が奥へ連続する点で共通していたが、C③では S②において複数見られた奥への方向性が一つに整理され、右側の水平景と間が断続的關係に変更されている。S④、C⑤は＜山岳景断続型＞のうち、左に重心を置く岩山群の遠景が右側懸崖左の空白へ連続する構成において強い類似性を示していたが、C⑤では両側の懸崖付近にそれぞれ複雑な岩山が加えられ、懸崖奥へと回り込む空間が立体感を増す構成をみせる。最後に S⑥、C⑦は強い類似性を示す＜山岳景圍繞型＞であるが、空間構成は継承したまま画題が変更されるとともに^{注 14)}、右側の懸崖が明瞭に描かれ前面に岩山が重ねられることで立体化する。3 つの山岳景において明瞭な対応関係が見られる一方、冒頭の C①は唯一の＜山岳景重層型＞であり、水平景に始まる山水小巻と異なった考え方で構成されているといえる。

一方、水平景は、両巻ともに 4 シーンであるが＜水平景階層型＞が S⑤から C②④⑧へ、＜水平景ラウンド型＞は S①③⑦から C⑥へと空間構成類型の該当数が反転し、山水長巻では山岳景との対照がより明瞭な＜水平景階層型＞が主になっている。S⑤と C④の間には強い共通性が認められるものの、全体に類型配置には大幅な変更が加えられ、さらに山水長巻においては C②⑧で山中の水平景が加えられることで、4 つの水平景がそれぞれに特徴的な構成を示す点も注目される。

最後に全体に対するシーンの配分を季節と対応させながら比較すると、山水小巻では春：S①②、夏：S③④⑤⑥、秋冬：S⑦となっており、春夏景ではほぼ同じ長さのシーンが、空間的に連続しながら繰り返され、秋冬景の突出して長い S⑦が断続する。これに対し、山水長巻では春：C①②③、夏：C④⑤⑥、秋：C⑦、冬：C⑧となっており、春景は断続的なシーン転換を含む山中の短い 3 シーンが繰り返され、夏景では長い 3 シーンが深く重なりながら連続的に続き、短い秋景がこれに続く。その後断続して長い山中の冬景で終わる。緩やかに連続する広い水面は夏景のみで描かれ、春秋冬景は山中のシーンのみで構成されている。山水長巻ではそれぞれの季節がシーンの長さで連続・断続関係において特徴付けられ、対照的構成へ変化しているといえる。また、巻末の冬から冒頭の春への移行を比較すると、山水小巻では水平景から水平景への移行であるのに対し、山水長巻では水平景の左端に山岳景の始まりを示す懸崖が描かれており、これが春景の山岳の始まりを示す構成を見せ、山岳景と水平景の対照が、季節の繰り返しの中により明瞭に位置づけられているといえる。これらの季節構成と空間構成類型の対応関係を照らし合わせると、山水小巻の春夏景が山水長巻の春夏秋景に、山水小巻の秋冬景が山水長巻の冬景に対応している。

全体を通してみると、山水小巻と山水長巻の類似点と相違点は次

図5 山水小巻と山水長巻の空間構成比較

の3点にまとめられる。

1. 山岳景と水平景の繰り返しによる構成という基本的構想、山岳景の背後に水平景が連続するというシーン間の基本的な空間的關係、山岳景の空間構成と全体に対する類型配置、以上3点は継承される。
2. 水平景において水平性が強調されること、懸崖付近が立体化・明瞭化することにより、山岳景と水平景がより対照的に構成される。
3. 季節構成では、山水小巻の夏景までが山水長巻の秋景までに対応し、季節間の対照がますますともに季節の繰り返し表現が構造的になる。

5. 考察：巻子の空間構成と鑑賞

これまで山水小巻と山水長巻を、山岳景と水平景というシーン区分を手がかりに分析し、山水長巻では山水小巻の全体構成が踏襲されながらも、より構造的・対照的に構想されていることを明らかにしてきた。巻子に限らず、当時の山水画は山水臥游といわれるように、人々が普段のあわただしい生活の中にあって、自然の中にある本来の生を生きる契機になっていたと考えられている^{注15)}。対象としてきた2つの巻子は、いずれも冒頭に高士が童子を伴って右から左へと歩を進める姿が描かれており、山水画に臨む人は巻子を展開させながら高士に自分を重ねあわせ、描かれた山水を体験すると考えられている。

ここでは本稿の分析の出発点であるとともに、結論の骨格をなしている山岳景と水平景について、鑑賞における山水の体験の様相を検討する。つぎに、これまで鑑賞形式にまとめた見解を見ることができない山水長巻の鑑賞について、山水小巻との間に見られた空間構成の対応関係から考察を試みる。

山岳景と水平景の鑑賞：まず山水小巻・山水長巻とも、水平景に該当するシーン内においては、空間的な連続性を確認することが出来る。全てのシーンにおいて地形は主に左右に連続する要素で構成され、鑑賞者はこうした水平方向に連続する空間の中で、山水の姿に

沿ってこれを体験することになる。一方、山岳景は両側に懸崖等の巨大な岩山の一部分が示され、シーン内部には奥行きのある空間が構成されていた。水平景と山岳景の接続部にあたる懸崖等は、地形のまとまりとしては山岳景に含めて捉えることが出来る。しかし、山岳景における両側の懸崖部分とシーン内部に展開する奥行きのある地形の間には、空間的な断絶関係が示唆されているように思われる。

つまり、ほとんどの懸崖は水平景の水際から立ち上がりその前面には岩山が配されているが、これらは水平景の左右の広がり境界づけ、かつ水平景との空間的な連続性を示している。一方、懸崖等の山岳景側は空白表現となり、水平景の境界をなしていた前面の岩山は山岳景シーン内部では小川や滝など山中の岩山となっている。画面構成という点からは強い違和感を伴うことなくシーンを展開させることが可能であるが、実際の地形の相違を考えると水平景と山岳景の間、すなわち懸崖部分には相当の空間的断絶が含まれていると考えられる。ほとんどの懸崖等には水平景側を回り込む道が設けられていたが、鑑賞者はこの道に沿って山中へと進み、空間的断絶の後に、山岳景の中央部に描かれている場面に前後の空間的・時間的連続性から切り離された場面として出会うのではないだろうか。

山岳景と水平景の対照は、単に空間構成のみならず、鑑賞者による山水の経験様態においても、水平景の連続的な空間・時間の体験と、山岳景における断絶的な空間・時間の体験という対照的な構成として捉えることができる。両者をつなぐ懸崖等の表現は、こうした観点からも巻子構成の要として理解できる^{注16)}。

山水長巻の鑑賞形式：山水小巻と山水長巻の全体構成は、実際の寸法の相違、つまり鑑賞形式の相違が想定されるにもかかわらず、空間構成という観点から比較すると多くの対応関係が見られた。両者の縦幅には倍近い相違があり、空間構成が継承されていても描写の密度には相違がある。しかし、山水長巻の構想において山水小巻の鑑賞形式、つまり鑑賞者が自ら展開させる画面のプロポーシオンや全体の構成に対する展開の様相も念頭に置かれていたという仮定にたてば、山水長巻の鑑賞幅もこれに対応させて考えられていた可能

性を指摘できるだろう。つまり、山水小巻が鑑賞される縦幅 21.5cm に対し肩幅 60-70cm はおよそ 1:3 の横長プロポーションであり、これを山水長巻に置き換えると、縦幅 39.2cm に対して約 120cm の鑑賞幅となる^{注 17)}。当時の鑑賞における所作については不明な点が多いが、この場合、自らが座したまま巻子を展開させるという形式とは明らかに異なった鑑賞形式が想定されることになり、逆に山水長巻において、少なくともこの一般的な鑑賞形式が念頭に置かれていなかった可能性も指摘できる。

むろん、両巻とも鑑賞幅は厳密なものではないし、同じ人物の同じ形式による鑑賞であったとしても、手繰り方の微妙な変化により、目の前に広がる山水のまとまりは無限に変化する。しかし、具体的な展開が多様であったとしても、鑑賞においてそれらは巻子全体の中に関連づけられるだろう。本稿で明らかにしてきた山岳景と水平景の空間構成および山水経験態の対照は、鑑賞者にとっての山水の骨組みである同時に、制作者にとっても山水構想の中心的な手法または形式であったのではないだろうか。これらの可能性を考察として示し結とする。

6. おわりに

本稿では雪舟による 2 つの四季山水図巻をシーンの連続として捉え直し、シーンの空間構成を手がかりとして巻子全体の空間構成の特徴を明らかにしてきた。今後は、室町期に描かれた他の山水画との比較を行うとともに山水画が担っていた文化的意義や社会的環境をふまえ、当時の理想的風景の型について研究を進めていきたい。

注

- 注1) 宮次男他編：角川絵巻物総覧，1995。美術史用語では巻子装の水墨山水図は絵巻物に含まない。
- 注2) 島田修二郎：禅林画賛，毎日新聞社，1987
- 注3) 美術史の分野においては、雪舟の真筆如何が明確に提示されることはほとんどない。本稿では雪舟の真筆および制作年代順については、次の論文に従った。山下祐二：雪舟画の本質- 逸脱について，国華，1276 号，pp. 19-32，2002。山水小巻については習作的性格から真筆としない見解もあり、鑑定が難しい作品とされている。
- 注4) 日明貿易等を通して日本へもたらされた山水画の多くは当時規範として扱われ模写を通して受容されるが、図巻構成においては、先行する作品の部分をつなぎながら長大な構図を制作する手法がすでに中国において伝統的に継承され、当時の日本においても理解されていたと考えられている。夏珪による図巻の構成法については、小川裕充：宋元山水画における構成の伝承，美術史論叢第 13 号，東京大学大学院人文社会系研究科・文学部美術史研究室，pp. 1-40，1997 年。雪舟による図様や意味の継承については後述。
- 注5) 山水長巻を雪舟の人生と重ね合わせる理解は一般的で多くの概説書に散見される。橋本治：わかりやすいもの 雪舟筆「山水長巻」，ひらがな日本美術史，第 2 巻，新潮社，1997 年他。禅宗の理念と結びつけるものとしては、大橋良介：雪舟とヨーロッパ『山水長巻』における「自然」，文化における＜自然＞，人文書院，1996 他。
- 注6) 夏珪による図巻との関連で山水小巻が扱われることがあるものの、本格的な研究は行われていない。
- 注7) 東京国立博物館，京都国立博物館編：雪舟：没後 500 年特別展，毎日新聞社，2002. 3
- 注8) 本研究では原寸大の複製を制作しこれを繰りながら研究方法の検討を行った。山水長巻は肩幅程度の繰り幅では画面の展開が小刻みに過ぎ、付人等により画面が展開されこれを鑑賞した可能性も考えられる。
- 注9) 図中におよその転換点を示した。山水長巻に関しては次の文献にもとづいて確認した。島尾新：雪舟の「山水長巻」 風景絵巻の世界で遊ぶう、

小学館，2001。山水小巻に関しては九州国立博物館、畑靖紀氏からご教示頂いた。記して感謝したい。

- 注10) 意味を伴う図様のまとまりについては、美術史の分野において詳細な検討が行われている。継承の様態がまとめられているものとして次の 2 つの論文が挙げられる。山下裕二：夏珪と室町山水画，室町絵画の残像，中央公論美術出版，pp. 12-31，2000。畑靖紀：山水長巻研究- そのくかたち> とく意味> をめぐって，天開圖書，2 号，雪舟研究会研究誌，pp. 3-27，1998 年。畑による論文では、意味を伴うまとまりに対する鑑賞者の理解等、作品をとりまく社会的な環境をふまえた鑑賞形式への言及も見られる。
- 注11) 秋冬山水図（東京国立博物館所蔵、国宝）の冬景でも用いられている有名なモチーフで、これがシーンのつなぎの役割を担っている可能性はすでに指摘されているが、巻子全体の骨格をなすモチーフとして注目されることはない（前掲注 9，pp. 82-83）。本稿で山岳景と水平景の区分として注目する懸崖等 14 箇所のうち、11 箇所で岩山の一部が描かれているが 10 箇所で下部が挟れた懸崖となっている。3 箇所では山岳景中央部の岩山表現により両側に懸崖等の立ち上がりが示唆される。
- 注12) 図 3.4 において構成要素の配置の様相はシーンで区分せず連続的に表現し、主な構成要素のみを引き出し線で示した。また方向性の模式化はシーンごとに行い、巨大な岩山による方向性を山岳景においてはグラデーションで、水平景においては点線で表した。
- 注13) C⑤の左端の部分は空間構成として C①と共通点が多いが、シーン全体の構成という観点から C⑤は山岳景断続型に区分した。
- 注14) 山水小巻では観瀑のシーン、山水長巻では山市晴嵐のシーンである。
- 注15) 小野恭平：山水の楽・序説：中世詩画軸の題詩からみた，日本建築学会計画系論文集，第 551 号，pp. 321-327，2002. 1 他。
- 注16) 山水長巻は C①において主人公の高士達が山道に登る姿に始まるが、すぐ後の C③において同じ高士達が橋を左から右へ、つまり巻子全体の方向では、終わってから始まりに向けて歩を進めている。一見すると強い違和感を抱く場面であり、高士が最後まで旅を続けるという期待が裏切られると紹介されることがある。しかし、山中の一場面が前後の連続性から切り離された形で示されているという理解にたてば、画面構成上の左右に拘泥することなく高士とともに旅を続けることができる。
- 注17) 巻子全体では山水小巻の方が横長であるが、山水小巻の夏景までの構成が、山水長巻の秋景までの構成に置き換えられていた。該当部のプロポーションがほぼ同じ（1:33）になっている点も注目される。

図版出典

図表中の山水小巻は京都国立博物館データベース、山水長巻は便利堂刊行の絵巻物シリーズ四季山水図巻より引用の上加筆。その他図表中の図版は筆者作成。

（2009年12月27日原稿受理，2010年2月23日採用決定）